

た。PMCT は小肝癌への有用な治療法で、複数回の PEIT に優る効果を認め、比較的安全に施行できた。しかし、他の部位の多発性再発率が 33.3% と高く、先端部の耐久性とともに今後の課題である。

18) Stage IV-A 肝細胞癌切除例の検討

高木健太郎・飯合 恒夫
小川 洋・海部 勉
滝井 康公・武藤 一朗 (新潟県立中央病院)
長谷川正樹・小山 高宣 (外科)
山崎 国男・植木 淳一 (同 内科)
畠山 重秋 (畠山 医院)

目的: Stage IV-A 肝細胞癌切除例の予後、術後補助療法、手術適応につき検討した。対象と方法: 当科で切除した肝細胞癌 180 例のうち Stage IV-A 33 例を両葉多発群 (以下 A 群 13 例) と脈管侵襲群 (以下 B 群 20 例) に分け、生存率、無再発生存率、術後療法を比較検討した。結果: 3 年、5 年累積生存率は A 群が 47.5%, 31.2%, B 群が 7.5%, 0% と統計学的に有意差はないものの A 群が良好な傾向を示した。2 年、4 年累積無再発生存率が A 群が 64.5%, 18.1%, B 群が 17.5%, 0% で A 群、B 群とも 5 年無再発生存例はなかった。結語: 1: Stage-A 肝細胞癌切除後特に脈管侵襲群では術後早期の補助化学療法が予後を改善する上で重要である。2: 両葉多発群は可及的切除と術中マイクロ波凝固療法との併用で予後を改善できると考えられた。

19) 原発性胆汁性肝硬変に対するリンパ球除去療法の試み

塚田 知香・市田 隆文
武井 伸一・杉村 一仁
富樫 忠之・佐藤 万成
内田 守昭・青柳 豊
朝倉 均 (新潟大学第三内科)

症例は 72 歳の女性。58 歳時胆道系酵素優位の肝機能異常を指摘された。腹腔鏡下肝生検にて CNSDC の所見を認め、原発性胆汁性肝硬変と診断され、UDCA 投与を開始された。70 歳時より黄疸、全身掻痒感の憎悪を認め、1996 年 1 月リンパ球除去療法 (LCAP) 施行目的に当科入院した。施行後、臨床症状、肝機能の改善を認めた事より、LCAP は原発性胆汁性肝硬変に対し有効な治療法である事が示唆された。その後 '97 年 2 月、同年 9 月に再び黄疸憎悪したが、LCAP 施行により、1

回目と同様に、臨床的、検査所見的に改善を認めた。

20) 脳死肝移植登録後、生体肝移植を施行した原発性胆汁性肝硬変の一例

武井 伸一・市田 隆文
富樫 忠之・青柳 豊 (新潟大学第三内科)
朝倉 均
橋倉 泰彦・川崎 誠治 (信州大学第一外科)

症例は 60 歳の女性。46 才時胆道系酵素の上昇を指摘され、54 才時原発性胆汁性肝硬変と診断され、UDCA 内服を開始した。57 才時より血清総ビリルビン値が上昇し、1997 年 10 月 16 日施行予定の臓器移植法の脳死肝移植レシピエントに登録し、10 月 9 日信州大学へ空路搬送した。肝性脳症 IV 度となり、血漿交換、人工呼吸器管理、持続透析施行した。脳死ドナーがあらわれなため、12 月 17 日、36 歳の次女をドナーとする生体部分肝移植を施行した。術後経過は良好で、術後 82 日目の腹部 CT で、移植肝の体積は、1036 cm³ と移植時の約 2.5 倍に増加した。

21) 扁平苔癬を伴った C 型慢性肝炎の一例

江部 和人・市田 隆文
坪井 康紀・保坂 幸男
高橋 澄雄・小方 則夫
青柳 豊・朝倉 均 (新潟大学第三内科)

症例; 53 歳男性。主訴; 皮膚掻痒感。現症; 陰部、背部、左前腕に紫紅色調の扁平隆起性の丘疹を認め、皮膚生検にて扁平苔癬と診断した。検査成績; ① GOT 155, GPT 239, γ -GTP 118 ② anti-HCV (+), HCV RNA 定量 < 0.5 Meq/ml HCV genotype II a ③ 肝生検: 慢性肝炎 (F2A2)。以上より C 型慢性肝炎及び肝外病変としての扁平苔癬と診断し、24 週間 IFN- α を投与した。治療終了後、扁平苔癬の消退、HCV-PCR の陰性化は認められなかった。

扁平苔癬は C 型慢性肝炎の肝外病変としてわが国では約 2% の報告がある。C 型慢性肝炎と扁平苔癬の関連及び IFN 治療について文献的考察を加え報告した。

22) 自己免疫現象を伴う C 型慢性肝炎の臨床病理学的検討

高橋 達・朴 載広
松井 茂・市田 隆文
青柳 豊・朝倉 均 (新潟大学第三内科)

自己免疫性肝炎 (AIH) 15 例、自己免疫現象を伴う C 型慢性肝炎 (C-AIH) 31 例、その他の C 型慢性肝

炎(C-CH)74例を対象として、臨床病理学的検討を加えた。AIHは女性に多く、高齢発症で、臨床検査データや自己抗体の頻度はAIH群でより活動性であることをうかがわせる値を示し、C-AIHはAIHとC-CHの中間の値をとることが多かった。C-AIHとC-CHの間にHCV遺伝子型の差はなく、インターフェロン治療に対するウイルス学的著効率にも差はみられなかった。組織学的にはAIHで活動性を示すHAIスコアのコンポーネントIおよびIIの値が有意に高かったが、門脈域におけるリンパ濾胞様細胞浸潤の程度はC-AIH、C-CH群で強かった、AIHスコアはAIHと他の2群を鑑別するのに有用だった。

23) 内視鏡的食道静脈瘤硬化療法前後における体外式腹部超音波による門脈系血流の比較

馬場 靖幸・本山 展隆	
渡辺 雅史・和栗 暢生	
望月 剛・夏井 正明	
新井 太・小林 正明	
杉村 一仁・本間 照豊	
成澤林太郎・青柳 均	(新潟大学第三内科)

当科にて内視鏡的食道静脈瘤硬化療法(EIS)を施行された11症例を対象に、体外式腹部超音波パルス・ドプラー法を用い、治療前後での門脈系血流量(門脈・脾静脈・上腸間膜静脈)の変化を比較検討した。EIS後の血流量は、いずれの血管でも増加を示したが、脾静脈では有意差をもって血流量の増加が認められた($p < 0.05$ Paired t-test)。さらに治療成績との比較では、硬化剤をより供血路中枢側まで注入できた症例ほど脾静脈血流量の増加率が高い傾向を示した。今後は、症例の追加と長期的な観察を続け治療効果・静脈瘤再発との関連性を検討して行きたい。

II. 特別講演

「肝臓の発生・分化・再生と肝細胞移植」

秋田大学医学部生化学第一講座教授

杉山俊博先生

第5回新潟周産母子研究会学術講演会

日時 平成9年10月25日(土)

午後2時より

会場 新潟大学医療技術短期大学部

D 41講義室

I. 一般演題

1) インドメタシン療法を施行した未熟児動脈管開存症の5例

長崎 啓祐・星名 哲(鶴岡市立荘内病院)
吉田 宏・伊藤 末志(小児科)

1994年12月に、わが国でも静注用インドメタシンが未熟児動脈管開存症の薬学的閉鎖療法薬として認可された。以来当科でも、5例の未熟児動脈管開存症に対して、インドメタシン静注を行った。適応に関しては、CVDスコア及び心エコー所見も参考にした。全例とも重篤な副作用なく、動脈管の閉鎖を確認した。副作用としては、尿量減少、尿素窒素・クレアチニンの上昇の他、消化管出血、血小板の低下を認めたが、いずれも一過性であった。当科では、インドメタシン使用時には禁乳にしdopamine, furosemideを併用し、現在まで幸い良好な結果を得ている。静注用インドメタシンは未熟児動脈管開存症に対して非常に効果の高い薬物であるが、重篤な副作用も多数報告されており、今後はその適応基準、投与時期・投与量に関してのさらなる検討が必要と思われた。

2) 胎児頻脈にて発見され電氣的除細動により救命しえた心房粗動の1例

山田 謙一・郡司 哲己(長岡中央総合病院)
大石 智洋・松井 俊晴(小児科)

胎児頻脈にて発見され、電氣的除細動により救命しえた、新生児心房粗動の1例を経験したので報告した。標準12誘導心電図及びATP 0.3 mg/kgの静注により2:1伝導の通常型心房粗動と診断し、電氣的除細動の適応と判断した。小児循環器専門医のいる長岡赤十字病院に緊急転送し、5Jにて除細動を施行して正常洞調律に復帰した。迅速な診断と、地域医療圏のセンター病院の緊急受け入れ体勢の連携による治療処置が効を奏した適例と考えられた。